


 書評

Henri EY 著／秋元波留夫監修，藤元登四郎，山田悠紀男訳

精神医学とは何か

反精神医学への反論

武正建一

本書は、Henri Ey(1900～1977)が亡くなる直前に書き、死後刊行された *défence et illustration de la psychiatrie—La réalité de la maladie mentale—*, 1978, Masson. の邦訳である。20 世紀を代表する精神医学者の 1 人エーのことをここにあらためて書くのもどうかと思われるが、本書が生まれるに至った背景ということで少し触れておきたい。精神障害の病理的構造とその病因・病源を求める理論体系が、ネオジャクソニズムとしての器質・力動論であるが、それとともにすべての精神疾患は病源のプロセスに根ざすという意味において、医学としての精神医学の独自性を終生主張してやまなかったのがエーである。

ところで、あれから早や 30 数年が過ぎようとしているが、1960 年代末に始まる伝統的な精神医学疾病論に対する激しい問題提起の動きは、評者の世代にとって忘れることのできない出来事であった。欧米に始まるこのうねりは、ややその形を変えながら日本にも波及し、医局講座制、学会活動などへの反体制的攻撃となつて、研究や臨床にも困難な状況をもたらしたことは周知の通りである。フランスでは、イギリスのレインやクーパーらの理論的影響を受けた反精神医学が、やがて 1968 年の 5 月革命という社会体制批判の過激な政治的イデオロギー運動によって増幅されてゆくことになる。この騒乱状態にいや気がさし、さっさとパリ大学教授を退いたドレー J. と対照的であったのが一精神病院の病棟医長としてその職を全うした在野のエーである。

当時の反精神医学運動に対し、エーは、主幹

を務めていた「精神医学の進歩」誌に、反・反精神医学と題する論文を載せるなど、積極的に反論を加えたのである。彼の理論的立場からすれば当然であったかもしれないが、それとともにあの生前みられた情熱と闘争心に満ちた人柄ならではの行動でもあった。本書は、いわばその総括であるが、同時に彼はこの小論を生涯をかけた研究に連なるものであると序文の中に記している。他方同じ混乱に見舞われながら、ややもすればことなかれ主義が支配的であった日本の中で、同様の人物を求めるとすれば、その 1 人が「精神医学と反精神医学」(1976)を著わした監修者の秋元波留夫である。この邦訳の完成も、何よりも秋元の熱意によると言つてよい。

原書は本文 81 頁の小冊子であるが、例によってエーの文章は難しく、訳者の努力によって日本語で読めることを喜びたい。1. 精神病理学的事象の判断を妨げるエピステモロジ的障害、2. 偽精神医学に向けられた主な非難、3. 科学としての精神医学(精神疾患の客観化)の各章に分かれているが、それぞれ、精神病理学的事実への無理解、非難のもとになっている収容主義や社会・心因論あるいは拡大解釈や通俗化に対する批判、そして器質・力動論に基づく人間存在の構造解体こそが精神疾患の本質である、といった内容が述べられている。訳者の 1 人藤元による解題には、エーの生涯に関する記述もあり、また 115 項目にわたる詳細な訳注も読者にとって大変ありがたい内容である。

30 数年前の嵐は過ぎ去り、今はもう医学としての精神医学への異論もあまり聞かれなくな

ってしまった。いやむしろ問題であるのは、あまりにも身体医学モデルに偏重した視点ではなかろうか。器質を基本にしながらも、心-身関係の力動的・弁証法的概念の中にこそわれわれの方向があるとしたのがエーであるが、評著

は、本書の刊行がすでに邦訳されている数多くの彼の著書を再読するきっかけになればと思っている。
(慈雲堂内科病院)

● A5 183頁 2002 本体4,200円 創造出版刊

糖尿病に関わるすべての臨床医のための総合診療誌 新雑誌「糖尿病診療マスター」 特集ガイド

第1号 (創刊号 2003 年 1 月発行)

特集 診察の達人 (責任編集) 天理よろづ相談所病院内分泌内科 石井 均

特集のねらい

時間が制約された外来でいかに効率良く診察所見をとるかは、すべての臨床医に不可欠の基本技能ですが、糖尿病診療においても身体所見(physical examination)の重要性はきわめて大きいものがあります。身長、体重、血圧(臥位と立位)、血管の所見は注意しなければなりません。腱反射と感覚検査の評価も大切です。これらはこれまで教科書にも詳しく記載されておらず、一般臨床医にとっては技能の実際を学ぶ機会が少ないのが現状です。そこで本号では、この機会にわが国の第一人者の先生方に登場していただき、具体的に診察技能の解説をお願いしました。記載はなるべく簡潔に、かつ具体的に旨とし、イラストや写真を有効に活用して理解しやすいものにしていただきました。

Master Lecture 診察法を極める

(東京都済生会中央病院 松岡健平,
インタビュアー: 石井 均・北西史直)

1. 糖尿病患者の全身診察手順
(北海道大学第2内科 吉岡成人)
2. 糖尿病患者の神経学的診察法
(信州大学保健管理センター 相澤 徹)
3. 糖尿病患者の手・足・皮膚の身体所見のとりかた
(自治医科大学内分泌代謝科 長坂昌一郎)
4. 糖尿病患者の動脈硬化性疾患の身体所見のとりかた
(大阪大学大学院医学系研究科情報伝達医学専攻・
病態情報内科学 山崎義光)
5. 糖尿病患者の心疾患(腎障害)の身体所見のとりかた
(東京医科大学第2内科 山科 章)
6. 病歴のポイント:
(天理よろづ相談所病院糖尿病センター 辻井 悟・濱川奈奈)
・眼科の問診のポイント(同 眼科 石郷岡均)
7. Case Discussion 天理よろづ相談所病院

第2号 (2003 年 3 月発行)

特集 検査はどこまでやるか (責任編集) 東京女子医科大学糖尿病センター 内潟安子

第3号 (2003 年 5 月発行)

特集 外来で糖尿病を治療するー治療困難な症例から学ぶ (責任編集) 北海道大学第2内科 吉岡成人

第4号 (2003 年 7 月発行)

特集 糖尿病患者の診療で欠かせない視点